

ホワイトヘッドの有機体の哲学における永遠的客体という概念

稲村 文

1. ホワイトヘッドの有機体の哲学とは

ホワイトヘッドのコスモロジーにおいて、宇宙の生成の仕方は、以下のように考えられている。

ホワイトヘッドはデカルトから始まってカントにつながる世界の二元化、そして台頭する自然科学に対する疑念を持っていた。それらはホワイトヘッドに言わせると「具体的なものと抽象的なものを顛倒する虚偽」(『科学と近代世界』)を含んでいる。そこで自らの新しい宇宙の見方を提案した。それが「有機体の哲学」である。それは世界を機械的ではなく、一つの生成として、有機的にとらえるやりかたである。

ホワイトヘッドのコスモロジーのなかで宇宙は次のように生成する。

(1) この世に存在する全ての事物は現実的実質 **Actual Entity** と呼ばれる。

(2) 現実的実質はそれぞれ主体的志向を持つ。例えば女の子がバレリーナになりたいとか、犬は今草の匂いが気になってそれに向かって歩いて行っているとか、受け取った感覚が概念として蓄積されるとか、石が風化によってだんだん削れていくとかといったようにである。それは意識を持つか持たないかに関係なく現実的実質すべてに当てはまるとされる。そしてそれらは主体的志向を満足させることを目指す。この過程において発生するのが抱握 **prehension** という働きである。抱握とは現実的実質が満足を目指すときに生じる新しい要素(これも現実的実質)を受け入れる、またはすでにあるものを捨てる働きである。現実的実質が主体的志向によって満足を目指すとき、そこには感じ **feeling** というものが生じるとホワイトヘッドはする。それは時間の経過、そして生物の働きかけによって過去から現在に進むときに生じる新しい場面のただそのもの、生物であつたら見たり感じたりする現在それ自身である。そしてその新しい現在という場面に出会う、そこから一步進むと現実的実質という主体自身に与件 **data** が蓄積される。この感じと与件の関係、それをホワイトヘッドは抱握と呼ぶ。抱握が現実的実質を刻々と新しく生成させていくのである。またこの抱握過程において、多の要素が現実的実質という一に取り込まれて統合される、または一つの要素が分散して多の現実的実質に取り込まれることをホワイトヘッドは合生 **concrescence** と呼ぶ。

(3) この抱握過程において常にそこに「進入 **ingress**」しているといわれるのが永遠的客

体である。永遠的客体とはプラトンのアイデアのようなものとされ、現実的実質の抱握過程に進入することによって、なんらかのかたちで現実的実質を限定していると思われる。ホワイトヘッドは「有機体哲学は、『個々の存在』が普遍者から離れて抱握されるとは主張しない。それは逆に、それらの存在が普遍者の介在によって抱握されることを主張する」(『過程と実在(上)』II iii)という。この普遍者の介在をもたらすのが永遠的客体の進入である。それは「それ自身においては現実的でないもの」であるが、「その重要性の度合いに応じて、現実的なあらゆるもののうちに例証されるような」ものである(『宗教とその形成』III iii)。そしてこの永遠的客体を現実的実質の抱握過程に進入させるのが神であるとされる。

(4) 現実的実質が抱握過程を経て最終的にたどりつくのが満足であるが、その満足は存在するためにそれ以上なにも必要としないものであるため、究極的理想であり、“真にあることのけっしてない”(プラトン『ティマイオス』)ものであるとされる。

2. ホワイトヘッドによる世界の秩序(ホワイトヘッド的偶然性の哲学)

ホワイトヘッドによれば、この宇宙にはある一定の法則があるが、その規則が完璧に守られたとき、そこから新しいものは何も生まれず、それは死を意味する。この世界は規則性と完全な偶然性の二つの要素から成り立っているのである。

前のある章(第二部第十章)において、「我と共に留まり給え」という祈りを支配する恒常感と「夜のとばりはすぐおりる」というその続きを支配している流動感に、既に注意が喚起されてきた。諸理念は、恒常性と流動というこれら二つの観念をめぐって形成される。避けるすべのない流動のうちに留まろうとするあるものがある。圧倒的な恒常性のうちに、流動へとのがれゆくある要素がある。恒常性は流動の中からのみ奪回されうる。そして一時的な契機は、恒常性に服することによってのみ、その十全な強度を見出すことができる。これら二つの要素を乖離しようとする人びとは、明白な事実の解釈を何ひとつ見出すことができない。(『過程と実在(下)』VI ii)

進化の術は変化の唯中に秩序を維持することであり、秩序の唯中に変化を維持することである。生命は生きながらミイラにされることを拒否する。ある無交換の秩序の組織において停滞が長びけば長びくほど、死んだ社会の崩壊は大きいのである。……感じの最後の繊細さは過ぎ去った組織からの重厚な継承をやわらげるため、ある新しい要素を要求しているかのように思われる。秩序は十分ではない。要求されるものは、もっとずっと複雑なものである。それは新しさへと入っていく秩序である。それ

は秩序の塊状性がたんなる反復に墮することがないためであり、新しさが常に組織の背景に反映されることがためである。(『過程と実在 (下)』V ii iii)

純粋に保守的なものは<宇宙>の本質に逆らっているのである。(『観念の冒険』XI x ii)

宇宙の全てが計算すれば導き出せるような秩序によって支配されているのではない。宇宙を人間が分かる範囲ですべて把握できる秩序だとしたら、そこから新しいものはいずれ生まれなくなる。完璧な秩序・規則は停滞を意味しているのだ。しかしそこに人間に予測できない出来事である「偶然」が起きることによって新しさが生まれる。そしてこの偶然の中にも人間はなんらかの秩序を見出そうとする。実在しないので詳細に説明することは難しい。しかし宇宙の生成がなぜだか分からないながらも続いているかぎり、そこには生成を促すなんらかの秩序、価値のような母体があるはずだ。それがホワイトヘッドの考えるイデア的概念永遠的客体である。

3. 神について

ホワイトヘッドは『過程と実在』において、この世界の生成を四段階に分けている。第一が「現実性には欠けるが、価値づけの調整において無限な概念的創始性の相」である。第二が「現実態の諸多性を伴った物的創始性の時間の相」である。第三が「完成された現実態の相」であり、「そこでは多は、個体的同一性にせよ統一性の完結性にせよ、失われるという制約なしに永続的に一である」。そして第四の相において創造の働きは完結されるとされる。「第四の相の働きは、神の世界に対する愛である。それは特殊な契機に対する特殊な摂理である。この世において為されるものは、天国の実在性へと転換され、天国の実在性は逆に、この世へと移行していく。こうした交互関係のゆえに、この世の愛は天国の愛に移行し、そしてふたたび、この世に還流する。こうした意味で、神は偉大な仲間——理解ある一蓮托生の受難者——である」。「完成された現実性は逆に時間的世界に移行し、そしてこの世界を制約して、時間的現実態がそれを関連ある経験の直接の事実として含む」。

神には原初的本性と結果的本性があるとされる。原初的本性について現実世界において我々が知りうるのは可能性だけである。神の結果的本性は世界において感じた物的感じを自らに取り込むことである。そしてそれはまた神に内包された世界にその感じを取り込むことでもある(以上『過程と実在 (下)』V ii より引用)。

こうして、すべての現実的実質と類比的に、神の本性は両義的である。神は原初的な性と結果的な性をもつ。神の結果的な性は意識的である。そしてそれは現実世界が神の本性の統一性において、そして神の智慧の転換を通して、実現されることである。原初的な性は概念的であり、結果的な性は、神の物的感じを神の原初的な概念に織り込むことである。(『過程と実在(下)』615頁)

4. ホワイトヘッドによる永遠的客体とは

プラトンのアイデアをモデルにしたとされる永遠的客体という概念はホワイトヘッドの哲学の中でもとても特徴的で重要な意味を持っているように思える。その永遠的客体という概念についてさらに考えてみたい。

ホワイトヘッドは世界の分析の仕方についてサミュエル・アレキサンダーの著書の表題「時間、空間、神性」を採用し、この三つが重要な宇宙の生成の要素だとしている(『思考の諸様態』131頁)。まず、時間は過程の推移を指しており、それがなければ目的を持つことやその他の沸き起こる感情、物体に属するエネルギーといったものは無意味なものとなる。時間がなくなれば、過程はなくなり、それと同時に世界の歴史もなくなり、世界は動的要素を欠いた物となってしまう。次に空間とは宇宙にある各存在(ホワイトヘッド用語では現実的実質)が瞬間瞬間に互いに関係し合い、影響を受け与えあいながらもそこに存在していることを表す静的な概念である。空間がなくなればこの世である存在が「完成」ということもあり得ない。なぜなら空間とはある存在を基準に観察したとき、それが何かに到達するまでに経る「到達までの途中駅」(『思考の諸様態』132頁)だからである。そしてその到達には時間という推移する動きが必要になる。時間と空間はこの宇宙における存在の現実的あり方である。さて最後に神性だが、神性は現実的ではない。しかしそれは人間が宇宙の生成について観察し分析するとき、避けて通れないしかし一番謎に満ちた要素である。人間が時間、空間のなかで生成してゆく宇宙を把握しようと試みるとき、そこに自分自身の外に広がる価値の世界を見ることになる。人間が世界にある何かしらの実在を理解しようと試みるとき、まずはそれを観念化し、そしてそれに価値づけをする。ではその価値づけは何を基準に行われているのであろうか。もちろん狭い範囲でみれば自分や身近な人々の利益になるためという利己的な欲求によって価値づけがなされていると言えるかもしれない。しかし、美や善について判断するとき、そこにはもっと普遍で、自己、そして人間を超えた超越的価値観があるように思える。なぜならその価値観は世界のどこを見ても普遍的に共通している。その超越的価値観に基づいてひとは、実在について善、美、悪などの現実的価値づけをおこなっている。もし、現実的価値観しかなく、それが例

えば生命の保存に役立つものを善とし、それを妨げるものを悪として判断しているという仮説を信じていたとする。しかしそれだけではなぜ生命は保存されるべきなのかはわからない。世界はどうやら刻々と生成しているようだけれど、なぜそうしているのかはわからない。その人間には完全には知り得ないかもしれない部分を知り得ないなりにおぼろげながらも理解しようとする方法、それがこの時間と空間を離れた神性という部分である。そしてこれがまさにホワイトヘッドによるイデア的概念「永遠的客体」なのである。

事実を特定の価値の実現として、あるいは可能性を実現に向かったの衝動として享受するとき、そのときこそわれわれは全体世界の究極的性格を強調しているのである。この究極的性格は二面を持つ——その一面は移ろう事実の可滅的世界が実現された価値の不滅性を獲得することであり、いま一つの面は単なる可能性の無時間的世界が時間内における実現を獲得することである。両者の架橋が、その両面を具えた「イデア」なのである。(ホワイトヘッド『科学・哲学論集（上）』97頁)

5. 神性の価値づけと抱握過程の説明

ホワイトヘッドの有機体の哲学の中の抱握過程において、この永遠的客体がどのように現実世界に関わってくるのか、見てみたいと思う(図1参照)。まず宇宙を観察するにあたって、観察対象である現実的実質を決める。それはある同じ状態に留まるということは決してなくそれは常に変化していく。その過程をホワイトヘッドは満足 *satisfaction* を目指していると呼ぶ。

そしてこの、ある現実的実質が何らかの完成を目指す過程の途中で、現実的実質が他の現実的実質に出会ったときに影響を受ける。その影響をホワイトヘッドは感じ *feeling* と与件 *data* の二つに分けて考える。まず現実的実質が他の現実的実質に出会ったときにはまだそれを物理的にも概念的にもそれを把握できるわけではなく、そこには単なる新しい刺激、衝撃のようなものがある。それが感じと呼ばれるものである。そしてその後、それを概念化したり物理的に自分のうちに含んだりしてそれから受けた刺激を自らのうちに安定した形で含むこととなる。それが与件と呼ばれるものである。

この感じと与件が発生する過程、それをホワイトヘッドは抱握 *prehension* と呼び、この過程において、永遠的客体が現実世界つまり現実的実質に進入 *ingress* するという。つまり自らに何か新しいものを含んだり、自らを新しい要素に受け渡したりするとき、人間の場合そこでは意識的に価値づけというものを行って何かを選んだり捨てたりしているといえるが、この宇宙に存在する実在すべても意識的でなくともそのような価値づけをおこなっ

ているという。そしてその価値づけの基準となるのが永遠的客体である。それはこの世界を混沌で概念、物さえもあり得ない世界から形をもったものとして生成していく世界へと導く秩序といえるだろう。

自己創造の過程は、潜勢的なものを現実的なものに変えて行く過程であり、またそういう変換の事実は自己享受の直接性を含んでいる。(『思考の諸様態』186 頁)

こうして生命の特徴は、絶対的自己享受、創造的活動、目的を持っているということである。ここでの目的は明らかに、創造的過程を指示していくための純粹に理想的なものの抱懷を意味する。また享受は過程に属しており、静的な結果の特徴づけではないのである。目的は過程に帰属する享受を目ざしている。(『思考の諸形態』187 頁)

しかし永遠的客体はそれ自体では何の意味も持たない。たとえば赤色を見たことのない人に赤色を考えるとと言っても無理である。それと同じように、赤色は赤いリンゴや赤い夕焼けを見るという経験から学ばれうるものである。このように、それ自体は形而上学的だとしても、永遠的客体はこの物質世界で冒険するときによってのみ、見いだされる概念である。そしてそのために、永遠的客体は「その進入に関して、何の打ち明け話もしない」(『過程と実在(下)』IV i) のである。

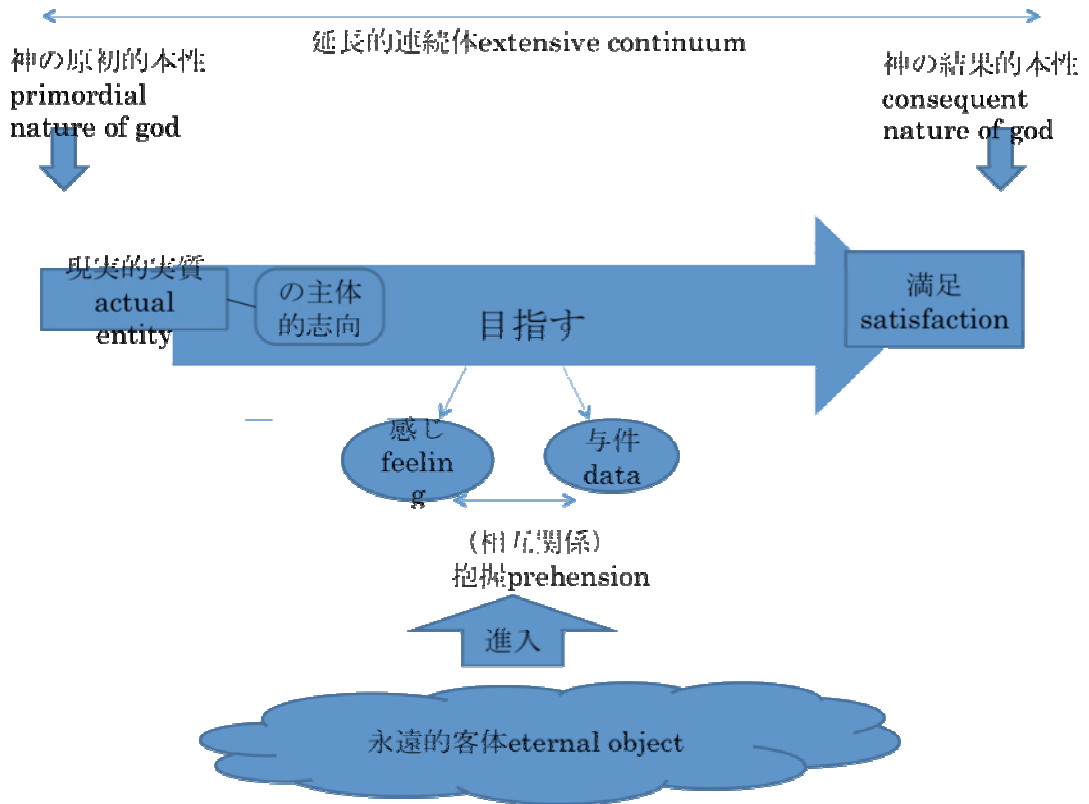
また永遠的客体にはプラトンのアイデアのように美や善や机といったふうに分類されているわけではない。それは現実的実質の抽象から導きだされるためにそれぞれの価値によるコントラストがあるとされる。しかしそれは現実的実質に進入したときに決定されるコントラストであって、永遠的客体という概念そのものをこの世界と離れたもう一つの理想の世界とみなすのは間違っている。なぜならそれは単独の概念としては何の意味もなさない形而上学的概念だからである。

おわりに

今回ホワイトヘッドによる概念永遠的客体について考えるにあたって、それは宇宙の生成を考える上で避けることのできない、しかし一番謎に満ちた生成の核心であることがわかった。それは機械論的には説明がつかない宇宙の偶然性や人間の心が世界を把握するときに生まれる概念や理想といったものに深く関係している。プラトンのアイデアをモデルとしたとされるそれは、しかしプラトンのアイデアよりもより現実的で論理的に矛盾がないように詳細まで考えられたものであるように思える。ホワイトヘッドは形而上学による高度

な抽象化によって、人間には語り得ないかもしれない、しかし数ある未知の事柄の中の一つの根本である生成の秩序の謎についてヒントを与えてくれたように思える。それは生物学的進化論も科学も説明してくれないことであるので形而上学として非常に意味があるであろう。これからも引き続きこの概念について考えていきたい。

[図 1]



究極的な満足に至ることはなく、上記の過程が永遠と繰り返される。宇宙に存在するすべての事柄の生成はこの抱握過程のプロセスで説明できるとされ、それらは満足を目指す際の抱握過程で他に一部を受け渡し、受け渡されることによってお互いに結びついている (nexus と呼ばれる関係)。この結びつきから除外された物的、心的事柄はこの宇宙の中のどこにも見つけることはできないとされる。

文献

藤沢令夫 (2000). 「イデアと世界」, 『藤沢令夫著作集 II』, 岩波書店.

ホワイトヘッド (1980). 『思考の諸形態』, 藤川吉美・伊藤重行訳, 松籟社.

—— (1981). 『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至考訳, 松籟社.

—— (1984). 『過程と実在 (上) (下)』, 山本誠作訳, 松籟社. [Whitehead A. N. (1985). *Process and Reality*, Free Press.]

—— (1986). 『宗教とその形成』, 斎藤繁雄訳, 松籟社.

—— (1987). 『科学・哲学論集 (上)』 蜂谷昭雄・井上健・村形明子訳, 松籟社.

[京都大学大学院修士課程・哲学]